

<聖書について>

1：旧約

(1)「生命の樹」と絶対三神の象徴

主の栄光は「あなたは私の顔を見ることはできない。あなたは私の後ろを見るが、私の顔は見えない」とある。これは、後ろ向きであるアダム・カドモンと、「生命の樹」の「合わせ鏡」の奥義を表している。

三種の神器、モーゼとアロンとミリアム、ヤコブと3人の息子（エフライム、マナセ、ベニヤミン）などは、「生命の樹」の象徴である。

カッパーラの象徴を読み解けない限り、聖書の解読は不可能である。欧米的思考では文字通り解釈するから、まったく意味不明のものとなる。怪物的な神の戦車とか、新約での黙示録など。また、ユダヤ教徒はカッパーラを読み解く“ゾハール”があってもイエスを認めないし、キリスト教徒はイエス＝ヤハウエ＝御子であることは認めないし、イスラム教徒はアッラーしか認めない、つまり、カッパーラを完全には理解できないので、彼らには聖書の意味することが理解できない!“聖書の民”であるにも関わらず。

カッパーラは象徴であるから、読み解くには、言語として象徴的な表現を用いるアジア的発想が必要である。カッパーラの奥義＝「生命の樹」の奥義は「知恵」や五芒星＝ソロモンの星として象徴される。カッパーラを極めし者は、ソロモン、聖徳太子（この人物像を創作した秦氏）、安倍清明などがおり、彼らの象徴は五芒星である。

真のカッパーラを伝える日本こそ、その役割を近い将来、果たすことになる。よって、来るべき時に備え、聖書を読んでおくことをお薦めする。旧約、新約、旧約続編と簡単な用語説明のある次のものをお薦めする。

聖書（ハンディバイブル） 新共同訳 日本聖書協会

(2)捧げ物（献げ物）

祭壇で焼き尽くす捧げ物＝生贄の規定がある。牛、羊、山羊、鳩は脂肪、腎臓、肝臓の尾状部を捧げ、血を祭壇の4つの側面に注ぐ。他に、上等の小麦粉、酵母無しのパン、オリーブオイル、乳香などの香料があり、穀物の捧げ物にはすべて塩を掛けて清める。これらを焼き尽くし、主に捧げる宥めの香りとする。“清めの塩”の概念はユダヤ教由来である。肉の脂肪は主に捧げる物であるから、脂まみれの肉を好む現在の日本人は…。

油、穀物、塩などを焼くのは、観音などで行う護摩焚きと同じである。護摩焚きは観音だけではなく、陰陽道のメッカでもある清明神社などでも行う。元は、このように旧約である。

異教徒の偶像崇拝では、人間を生贄として捧げていたので、主は偶像崇拝を徹底的に糾弾した。

なお、このように焼き尽くす捧げ物を捧げて行う生贄の儀式を燔祭（はんさい）と言うが、現在の神社では行われていない。これは、イエス自身が生贄となったことにより、必要なくなったからである。

(3) 偶像（異教）崇拜

主は偶像崇拜を徹底的に糾弾している。偶像とは異教崇拜の象徴であり、神を象った木像や彫像を拝むことである。また、旧約で姦淫は罪である。姦淫は文字通りの意味もあるが、偶像崇拜も意味する。偶像の象徴は異教の神バアルなどで、地母神信仰が基本となっている。主は男神だから、それから見れば、地母神が中心の偶像崇拜はまさに姦淫に等しい。その偶像崇拜の具体的な内容が「知恵の書」などに書かれている。

体を傷つけて血を流す、息子や娘に火渡りさせる、魔術の業や神を汚す儀式を行う、無慈悲にも子を殺す、血をすすり人肉や内臓を食べる宴を開く、踊り狂う秘密の教団に入門し、かよわい我が子の命を奪う親たち（ディオニソス、幼児生贄）。偶像崇拜の結果、幼児殺しの犠牲や密儀、奇怪なしぐさを伴う淫らな酒宴、性的倒錯、結婚の乱れ、姦淫、好色が至る所にある。

このような行為が聖書に記載されているということは、その時代に、実際に行われていたからである。これは現在の大都市でも氾濫しており、幼児犠牲や性的倒錯などは、2千年以上も前から続いているのである。「火渡り神事」なども、信じる者は炎にも焼かれない、ということを曲解したものであり、本来は行ってはならないことである。主は、肉体も大切にしよう説いている。

また、レビ記では、霊媒や口寄せは必ず死刑に処せられる、とある。申命記では、預言者や占い師の印や奇蹟が実現した時、その神に従おうと誘われても耳を貸してはならない、とある。主に背くよう道を迷わせるのが目的であり、そのような輩は死刑に処せられるのである。つまり、これらも偶像崇拜のなせる業である。

現在、巷に氾濫している占いや魔術の本、占い師や霊媒、チャネラー、(自称)超能力者などの言うことは魔道であるから、まともに聞いてはならないのである。カッパラを理解する預言者の言うことでなければならぬ。(預言：聖書に関わり、必ず実現する。予言：聖書に関わらない。あるいは、実現したりしなかったりする。)

しかし、たとえ偶像崇拜しても、主は罰する熱情の神であると同時に、忍耐と慈悲の神であるから、悔い改め、それに伴って行動すれば赦される。悔い改め方は、灰や塵を被って祈り、二度と実行しないことである。衣を裂いて粗布を纏い、灰を被って祈った、という場面がよく出てくる。日本でも、偶像崇拜の行動（性器を象ったものを身に付けて歩くなど）の後に、灰を被って御利益を受けるといふ神事がある。

他の例としては、熱田神宮の夏越しの祓え（半年間の厄を祓う御神事）で、衣を裂くという行為が行われる。紙垂（かみしで）に似た人形の白紙に名前と年齢を記入し、心付けを払って、3つの葉に分かれた葦を頂く。本殿の向かって左側に、七五三のゲマトリアを形成する点に忌竹（いみだけ）を配し、神事を行う場所を囲っている。祓えを受ける人は下層世界に相当する区画に東向きに座る。神職は白装束の9人×2で、至高世界に座って祓えを受ける人たちの方を向く。神事は中高世界で行われる。

大祓えの祝詞が唱えられ、東向きと南向きに榊で祓えを行う。その後、祓えを受ける人は頂いた葦を持ち、前肩の左→右→左に当てて厄を移す。それを神職が回収して唐櫃に入れる。

更に、白い布を2セット、神職がそれぞれ4つに裂いて唐櫃に入れる。そして、名前と年齢を記入した人形の白紙も唐櫃に入れる。これで神事は終了である。穢れを移したこれらのものは、おそらくすべて焼いて清められる。

人形は人間の身代わりである。3つの葉に分かれた葦は「生命の樹」である。葦はエジプトやメソポタミアに生育するし、日本神話に於ける日本は葦原中国（あしはらのなかつくに）である。

忌竹はイエスが掛けられた十字架であり、伊雑宮の御田植祭で立てられる忌竹と同じ意味である。ゲマトリアの3×3は「生命の樹」の三柱三界である。白装束は死に装束。9人×2は三柱三界×2で、「生命の樹」の旧約と新約の「合わせ鏡」を示す。

東は日の出、南は正殿の向きで太陽＝イエスを拝する。

唐櫃＝契約の箱アークを模したもの。旧約では、罪や穢れを祓うために、衣を裂き、粗布を纏い、時には灰を頭から被り主に祈った。新約では、イエスが十字架に掛けられる前に服を剥ぎ取られ、ローマ兵がくじ引きをして裂いて分けた。

(4) ダン族

ヤコブは死に際に息子たちを祝福したが、ダンについてはこう祝福している。

“ダンは自分の民を裁く。イスラエルの他の部族のように。ダンは道端の蛇。小道のほとりに潜む蝮。馬のかかとを咬むと、乗り手は仰向けに落ちる。主よ、私はあなたの救いを待ち望む。”

蝮は毒蛇であるから、サタンの象徴でもある。実際、背教した王レハブアムは、偶像の象徴である金の牡牛をダン族の土地であるダンに置いた。(もう1つ、エフライム族の土地であるベテルにも。)

主の命令に従って幕屋を造る際、主はユダ族のフルの孫、ウリの子ベツアルエルとダン族のアヒサマクの子オホリアブに対して、すべての工芸に従事させた。ダン族は工芸に秀で、紋章などの意匠考案もしていたのである。ならば、偶像を造るのもお手のもの。そのため、偶像崇拝の象徴となったのであろう。

なお、ダン族はインドに渡り、仏教の基を創ったという説がある。

http://www.geocities.jp/atelier_efraym/index.htm

それ故、“仏壇”“檀家”などダンに関係する言葉がある、と説明されている。ダン族は工芸等に秀で、木工技術に長けていたので、仏壇や仏像を造るのは得意である。

岸和田の地車（だんじり）は、山車によって木工技術を神に捧げる木工技術者集団の祭りである。これが、ダン族に由来するらしい。地車では、祇園祭の

ような扇子ではなくて、ダン族に由来する“団”が名前に付く団扇で扇ぐ。ダン族はまとまって行動したのでそれを“団体”といい、団、檀、段などの字が付く。また、イスラエル十二支族が行進する時、ダン族は最後に行進した。民数記では、“次にダンの子たちの宿営の旗が、その隊を従えて進んだ。この部隊は全て、宿営のしんがりであった”とあり、ダン族は武闘集団でもあったので、行進の最後と決まっていた。それ故、地車は“檀尻”“段尻”とも書かれ、荒々しい。アーク＝神輿はレビ族しか扱えないから、地車は御輿ではなく、出エジプト後のダン族のリーダー、アミシャダイに因んで車台（しゃだい）形式の山車が使われる。

なお、この著者はアークや神殿の大きさ、登場人物の年齢などは、重要な場所の緯度、経度、夏至と冬至の太陽角度、自転公転周期などが関わっていることを述べている。古代エジプトと関連付けた、興味深い説である。この著者は、イエスの再臨は2037年としている。

(5) イザヤ書とハガイ書

イザヤ書はイエスの登場を預言した極めて重要な預言書であり、伊雑宮はこれに因む。伊雑宮の御田植え祭りは、毎年6月24日に行われる。植物は太陽の恵みを受けて育つから、普通は春分あるいは夏至から数えて何日目、と決められても良いと思うが、そうではなく、必ずこの日に行われる。

ハガイ書に、バビロン捕囚後、ソロモンの第二神殿建設作業に取りかかった日が記載されている。それが6月24日である。伊雑宮は新たな神殿として復活することを思い出そう。

(6) 聖書の種類

ユダヤ人ラビ、マーヴィン・トケイヤー氏によると、2千年前のユダヤ神殿にあった聖書は3種類だったそうである。それを1つにまとめたのが、現在の聖書である。よって、現在の聖書（ヘブライ語）をコンピューターにインプットして操作すると、様々な予言が浮かび上がるバイブルコードはナンセンスである。

2：新約

まず、並んでいる順番がおかしい。福音書としてはマルコが最も古い、マタイ→マルコ→ルカ→ヨハネの順に並んでおり、教会の意図的な策略を感じる。なお、各福音書は使徒のマタイやマルコが書いたわけではなく、第三者によるものである。

マタイ、マルコ、ルカは共観福音書と言われ、一貫してペトロパウロというアンティオキア教団の正当性を主張している。ペトロはマタイ書などでイエスから「サタンよ」と言われているし、理解が低く、いつもイエスから叱責されていた。また、パウロは元々サウロといってファリサイ派で、使徒を弾圧していたが、イエスの幻により改宗した経緯があり、直接イエスには会ったこと

がない。このような人物が広めたのが、今日のキリスト教である。(ダビデの前の王もサウロといい、ダビデの功績を妬んだりしていた。これも、一種の暗示である。)

しかし、イエスは「私が来たのは、律法や預言者を廃止するためだと思ってはならない。廃止するため、ではなく、完成するため、である」と言って、自分の教えを異邦人に対して説くことはなかったことから、ペトロやパウロが異邦人に対して、殉教してまで説く意味が無い。それに、イエス＝ヤハウエであり、ヤハウエは肉体を傷つけたりすることを禁じているし、イエスが十字架の犠牲となったから、それ以上の殉教などの犠牲は必要ない。すでに、直弟子のペトロの段階から、教義が変更されているのである。

最後に出たのはヨハネ福音書だが、これは共観福音書とはかなり趣が異なる。これにのみ「私は在りて在る者」と記載されており、神道の真髓と一致する。そして、磔刑の場面でのイエスの言葉が違う。「渴いた。成就した」とあり、最も妥当性がある。イエスは、自らが十字架に掛かることを望んでいた。そのような人が、直前になって苦悩したり、十字架上で父に見捨てられたなどと発言するはずがない。

また、マグダラのマリアの扱いが破格である。「この人を引き取らせて下さい」とは、近親者が言うことで、妻であることが暗示されている。(マグダラのマリアについては詳細に後述する。)

同じヨハネでも、ヨハネの黙示録は極めて不可解で異端的な預言書であるが、“正統”として編纂されている。

よって、共観福音書が欺瞞に満ちていることから、原始キリスト教の流れを汲む何者かがヨハネ福音書を編纂し、黙示録も残したと考えるのが妥当である。当時は、いろいろな解釈があったとみえ、最近になって“異端”とされた福音書の邦訳が出版されている。(これについては後述する。) どうも、マグダラのマリアが最も素晴らしい弟子だったことなどは当時の常識であり、さすがに、それまで打ち消すことはできなかったようである。そのため、共観福音書でもイエスが復活した後、最初にマグダラのマリアに会う、という破格の扱いになっているのである。

3：ヨハネの黙示録の解釈

ヨハネの黙示録の解釈はカッパラー的にも極めて難しく、発表された当時の事象のみならず、聖書に於ける天地創造からイエス再臨の未来に渡る幅広い内容を含んでいる。1つの記述が、複合する別の時代の意味を含み、互いに絡み合いながら過去と未来を同時に表す高等預言であり、これを両義預言と言う。現段階のできる範囲で推測した。

(1) 災いのラッパと鉢

ヨハネの黙示録では、天の御座にいる方＝御父が 7 つの封印で封じてある巻物を右手に持っており、屠られた小羊＝イエスが次々と封印を解いていく様子

が書かれている。封印が解かれる毎に災いが起こり、7つの封印がすべて解かれた後は、7人の天使がラッパを吹き鳴らしていく。ラッパが鳴る毎に、災いが起こる。記述の順番としては、この後に7人の天使が最後の7つの災いが盛られた鉢を次々と地上に注ぎ、災いを起こしていく。この意味を考える。

まずは封印である。旧約の「詩篇」や新約の「ペトロの手紙」にあるように、天地創造を行った神の1日は、人間界では千年に相当する。天地創造に於いて、神は7日目を聖別して祝福したから、アダムのエデン追放から6千年が過ぎ去った後、至福の千年が訪れると見なす。1つの封印とは、アダムのエデン追放から数えて千年毎の経過を表す。アダムを追放はBC4000頃とされており、その時点から千年毎の出来事を表しているから、現在は最後の7つ目の封印が解かれた時期となる！6つ目の封印は次のようにある。

“小羊が第6の封印を開いた。その時、大地震が起きて、太陽は毛の粗い布地のようになり、月は全体が血のようになって、天の星は地上に落ちた。まるで、いちじくの青い実が、大風に揺さぶられて振り落とされるようだった。天は巻物が巻き取られるように消え去り、山も島も、皆その場所から移された。(中略) 神と小羊の怒りの大いなる日が来たからである。”

6つ目の封印はAD1000頃に解かれた。それから20世紀末までに起こった大惨事といえば、第一次・第二次対戦において他にない。第6の封印は、まさに広島と長崎に於ける原爆炸裂の様子を描写している。“天の星が落ちる”とは、サタンが天から地に堕ちたことを意味する。原爆とそれに続く水爆はサタンの申し子であり、まさに地に落とされた。そして一瞬にして、あらゆるものが消え去った。

第7の封印は次のようにある。

“小羊が第7の封印を開いたとき、天は半時間ほど沈黙に包まれた。そして、私は7人の天使が神の御前に立っているのを見た。彼らには7つのラッパが与えられた。また、別の天使が来て、手に金の香炉を持って祭壇のそばに立つと、この天使に多くの香が渡された。すべての聖なる者たちの祈りに添えて、玉座の前にある金の祭壇に捧げるためである。香の煙は、天使の手から、聖なる者たちの祈りと共に神の御前へ立ち上った。それから、天使が香炉を取り、それに祭壇の火を満たして地上へ投げつけると、雷、さまざまな音、稲妻、地震が起こった。”

一般的に、ラッパの後に続くと言われている7つの災いが盛られた鉢については、次のようにある。

“私はまた、天にもう一つの大きな驚くべきしるしを見た。7人の天使が最後の7つの災いを携えていた。これらの災いで、神の怒りがその極みに達するのである。私はまた、火が混じったガラスの海のようなものを見た。更に、獣に勝ち、

その像に勝ち、またその名の数字に勝った者たちを見た。彼らは神の豎琴を手にして、このガラスの海の岸に立っていた。彼らは、神の僕モーゼの歌と小羊の歌とを歌った。「全能者である神、主よ、あなたの業は偉大で、驚くべきもの。（中略）あなたの正しい裁きが、明らかになったからです」この後、私が見ていると、天にある証しの幕屋の神殿が開かれた。そして、この神殿から、7つの災いを携えた7人の天使が出て来た。天使たちは、輝く清い亜麻布の衣を着て、胸に金の帯を締めていた。そして、4つの生き物の中の1つが、世々限りなく生きておられる神の怒りが盛られた7つの金の鉢を、この7人の天使に渡した。この神殿は、神の栄光とその力とから立ち上る煙で満たされ、7人の天使の7つの災いが終わるまでは、誰も神殿の中に入ることができなかった。”

ラッパに続く、とはなっておらず、“私はまた見た”となっている。ラッパの方は“香の煙は、天使の手から、聖なる者たちの祈りと共に神の御前へ立ち上り”、鉢の方は“神殿は、神の栄光とその力とから立ち上る煙で満たされた”であり、両者が対応していることが解る。7人の天使のラッパと7つの災いの鉢の内容を対比しても（ここでは割愛）、ほぼ同じようなことを言っている。

つまり、ラッパと鉢が「合わせ鏡」となっており、同じ現象を違う角度から見ているのである。また鉢の方には、神の僕モーゼの歌と小羊の歌とを歌った、とあり、モーゼ（旧約）と子羊（新約）で「合わせ鏡」であることを暗示している。

では、第7の封印が開かれた現在、幾つ目のラッパ、あるいは鉢なのか？ラッパと鉢の解りやすい方で見してみる。

“第3の天使がラッパを吹いた。すると、松明のように燃えている大きな星が、天から落ちて来て、川という川の1/3と、その水源の上に落ちた。この星の名は「苦よもぎ」といい、水の1/3が苦よもぎのように苦くなって、そのために多くの人が死んだ。”

よく言われている通り、“苦よもぎ”のロシア語が“チェルノブイリ”であり、多くの人が死んだ。放射性物質の浄化方法が無い現在、核弾頭のみならず、経年劣化した原子炉も人類にとって脅威である。これは1986年に発生し、第6の封印の範囲で起きているから、預言が早まっている可能性がある。あるいは、アダムのエデン追放日時を正確には特定できないので、この程度の誤差は発生してもおかしくない。

“第4の天使がラッパを吹いた。すると、太陽の1/3、月の1/3、星という星の1/3が損なわれたので、それぞれ1/3が暗くなって、昼はその光の1/3を失い、夜も同じようになった。”

三百人委員会のある計略が準備され、世界がサタンの手に落ちようとしている。それ故、世を照らす光が減少した。

“第5の天使がラッパを吹いた。すると、1つの星が天から地上へ落ちて来るのが見えた。この星に、底なしの淵に通じる穴を開く鍵が与えられ、それが底なしの淵の穴を開くと、大きなかまどから出るような煙が穴から立ち上り、太陽も空も穴からの煙のために暗くなった。そして、煙の中から、イナゴの群れが地上へ出て来た。このイナゴには、地に住むサソリが持っているような力が与えられた。イナゴは、地や草やどんな青物も、またどんな木も損なってはならないが、ただ、額に神の刻印を押されていない人には害を加えてもよい、と言ひ渡された。殺してはいけないが、5か月の間、苦しめることは許されたのである。(中略)さて、イナゴの姿は、出陣の用意を整えた馬に似て、(中略)胸には鉄の胸当てのようなものを着け、その羽の音は、多くの馬に引かれて戦場に急ぐ戦車の響きのようであった。(中略)イナゴは、底なしの淵の使いを王として戴いている。その名は、ヘブライ語でアバドンと言ひ、ギリシャ語の名はアポリオンと言ふ。”

サタンが地に堕ちた＝三百人委員会の計画が実行された。底なしの淵に通じる穴＝サタンのいる地獄を開く鍵が与えられたため、大きなかまどから出るような煙が穴から立ち上り、煙の中からイナゴの群れが地上に現れ、ある人たちを苦しめることとなった。アバドンとは、ヘブライ語で“彼は殺した”“破壊”“奈落の底”を意味する。

底なしの淵とは、三百人委員会による世界統一＝資本による人類奴隷化である。イナゴはミサイルを搭載した戦闘機であり、軍隊の象徴である。世界貿易センタービルから立ち上った煙は、まさに大きなかまどから出るような煙であった。この茶番劇をきっかけに、米国民は騙され、米国はイラク法案を可決して多国籍軍を派遣し、イラクの人たちを現在も苦しめている。

“第6の天使が、その鉢の中身を大きな川、ユーフラテスに注ぐと、川の水が枯れて、日の出る方角から来る王たちの道ができた。私はまた、竜の口から、獣の口から、そして、偽預言者の口から、蛙のような汚れた3つの霊が出て来るのを見た。これはしるしを行う悪霊どもの霊であって、全世界の王たちのところへ出て行った。それは、全能者である神の大いなる日の戦いに備えて、彼らを集めるためである。一見よ、私は盗人のように来る。裸で歩くのを見られて恥をかかないように、目を覚まし、衣を身に着けている人は幸いである。一汚れた霊どもは、ヘブライ語で「ハルマゲドン」と呼ばれる所に、王たちを集めた。”

ハルマゲドンとはイスラエルにある地名のことで、正式には「メギドの丘」と言う。ここには、まだ各国の軍隊は集まっていない。よって、第5のラッパが鳴らされた、あるいは第5の天使が鉢を地上に注いだところまでである。ちなみに、第5の天使の鉢の方は次のようになっている。

“第5の天使が、その鉢の中身を獣の王座に注ぐと、獣が支配する国は闇に覆われた。人々は苦しみもだえて自分の舌をかみ、苦痛と腫れ物の故に天の神を

冒瀆し、その行いを悔い改めようとはしなかった。”

獣に協力する国では、あらゆる悪が蔓延る。人々の常識がなくなる。生活苦やいじめなどで自殺者が増える。それまでには考えられなかった、あらゆる犯罪が横行する。貧富の差が極限に達し、多くの人々の生活が圧迫される。富める者は、更なる金儲けに走る。様々な病原菌やウイルスが蒔かれ、蔓延する。しかし、それでも人々は自分のことしか考えず、慈愛に満ちた至福の千年王国のことなど頭にもなく、神の存在を信じる者は僅かとなる。

つまり、現在は各国まさにこのような状況であり、ハルマゲドンが目前に迫っているのである！米国やイスラエルがどう動くかにより、いつ起きても、おかしくはない。イスラエルは、メギドの丘に“人類最終戦争の地”という看板まで立てて、時を伺っているのである。別の角度からも見てみる。黙示録の初めの方にはこうある。

“私が見ていると、見よ、開かれた門が天にあった。そして、ラッパが響くように私に語りかけるのが聞こえた、あの最初の声が言った。「ここへ上って来い。この後必ず起こることをあなたに示そう」

私は、たちまち霊に満たされた。すると、見よ、天に玉座が設けられていて、その玉座の上に座っている方がおられた。(中略) この玉座の中央とその周りに4つの生き物がいたが、前にも後ろにも一面に目があつた。第1の生き物は獅子のようであり、第2の生き物は若い牡牛のようで、第3の生き物は人間のような顔を持ち、第4の生き物は空を飛ぶ鷲のようであつた。この4つの生き物には、それぞれ6つの翼があり、その周りにも内側にも、一面に目があつた。彼らは、昼も夜も絶え間なく、言い続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主、かつておられ、今おられ、やがて来られる方」

「事」が起きる前に、異様な様態の4つの生き物が天の玉座を囲んでいるが、主を賛美しているので天使である。また、エゼキエル書にこうある。

“私が見ていると、北の方から激しい風が大いなる雲を巻き起こし、火を発し、周囲に光を放ちながら吹いてくるではないか。その中には、琥珀金の輝きのようなものがあり、また、4つの生き物の姿があつた。その有様はこうであつた。彼らは人間のようなものであつた。それぞれが4つの顔を持ち、4つの翼を持っていた。脚はまっすぐで、足の裏は仔牛の足の裏に似ており、磨いた青銅が輝くように光を放っていた。また、翼の下には4つの方向に人間の手があつた。4つともそれぞれ顔と翼を持っていた。翼は互いに触れ合っていた。それらは移動するとき向きを変えず、それぞれ顔の向いている方向に進んだ。その顔は人間の顔のようであり、4つとも右に獅子の顔、左に牛の顔、そして4つとも後ろには鷲の顔を持っていた。顔はそのようになっていた。”

これは神の戦車メルカバーである。つまり、先の異様な様態の4つの生き物

とは、翼の数に違いはあるものの、神の戦車メルカバーのことである。更に、第7の封印が解かれる前にこうある。

“この後、私は大地の四隅に4人の天使が立っているのを見た。彼らは、大地の四隅から吹く風をしっかりと押さえて、大地にも海にも、どんな木にも吹きつけないようにしていた。私はまた、もう1人の天使が生ける神の刻印を持って、太陽の出る方角から上って来るのを見た。この天使は、大地と海とを損なうことを許されている4人の天使に、大声で呼びかけて、こう言った。「我々が、神の僕たちの額に刻印を押してしまうまでは、大地も海も木も損なってはならない」”

4人の天使は、大地や海や木を損なうために遣わされたのであり、時が満ちるまで待っている。つまり、役割としては“事”を成就させることであり、神の戦車メルカバーの喩えである。つまり、第7の封印が解かれる前に、メルカバーが降りてくるということである。では、これは具体的にはどういうことなのか？実は、占星術的に興味深い現象のことである。

占星術では、「人の顔」＝（緑）＝水瓶座＝北、「獅子の顔」＝（赤）＝獅子座＝南、「牛の顔」＝（黄）＝牡牛座＝東、「鷲の顔」＝（青）＝サソリ座＝西とする。鷲が鷲座ではなくサソリ座となっているのは、次のような理由による。

“鷲は、人間を表す象徴である。サソリは鷲の逸脱を表しており、鷲の、深淵への墜落である。墜落が起こるには、何かが高みに存在していなければならない。だから、深淵への墜落とは、高みにある領域からの墜落である。ルシファーは天使で高次の存在であったが、神に反逆して地に堕ちた。ルシファーは翼をもがれた墮天使である。つまり、サソリとは鷲が萎縮した姿であり、鷲が落とす影である。”

つまり、メルカバーはこれら4つの星座に対応している。また、「人間の顔」「獅子の顔」「牛の顔」「鷲の顔」はカッパーラという四位階に対応している。それは、「流出界」「創造界」「形成界」「活動界」である。流出界から放たれた神の意思は、最頂部のケテルから滅びの世界のマルクトまで電撃のように駆け下る。4つの位階は、神の創造の業の、段階的構造を象徴的に表している。占星術とカッパーラに通じた予言者が、過去にいた。誰もが知っているあの予言で有名である。

“1999年第7番目の月／驚愕の大王 天から地に落とされし／アンゴルモアの大王を蘇らさんと／その前後にマルスは平和を盾に支配する。”

言わずと知れた、ノストラダムスの予言である。ノストラダムスは、当代きってのカバリスト（カッパーラの使い手）であった。だから、この予言は象徴で読み解かなければならない。

第7の月は太陽暦か太陰暦かということはあるが、その頃に惑星の配置は次

のようになっていた。

太陽、水星、金星－獅子座
火星、冥王星－サソリ座
天王星、海王星－水瓶座
木星、土星－牡牛座

この 4 つの星座の配置は十字型であり、地球以外の太陽系の星々が十字型に配置するという滅多に起きないグランドクロス (grande croix) が形成された。つまり、地球以外の太陽系の星々が天空で十字架を形成し、地球が天の十字架に掛けられたのである！これが、“驚愕の大王 (grand Roy) 天から地に落とされし” ということである。

マルスは火星＝軍神であり、米国は火星を守護星とする。米国は 1998 年 8 月 21 日に対テロ戦争と称してアフガニスタンとスーダンに向けてトマホークを 100 発近く発射し、対テロ戦という大義名分がこの頃から盛んに言われ出した。これが、その前後にマルスは平和を盾に支配する、ということである。(アンゴルモアの大王については、現時点では不明である。)

よって、本格的に第 7 の封印が解かれる前＝1999 年に、大地の四隅＝地球の周りにメルカバーが配置されてグランドクロスを形成し、地球が天空の十字架に掛けられ、“事”を成就させるための準備が整った、ということである。

なお、ノストラダムスは「諸世紀」の中で、「契約の箱アーク」に関わると思われる予言（未来や過去の幻視）もしている。諸世紀に於いて、章やその中で番号は、事象の順番に関係ない。

・3 章 13 番

アークの光で、金、銀が溶解する／両方の罪人たちは、互いに他方を殺しあうだろう／巨大な都市は倒壊し／艦隊は水の中に沈むだろう

偶像崇拜が蔓延ってきた当時のイスラエルの状況である。また現在に於いては、両方の罪人とはおそらく三百人委員会と教会であり、アークの光は日本である。金、銀は偶像の象徴だから、日本の真実が公開されると、欧米式の巨大な（ソドムやゴモラのような）都市や軍隊は崩壊する。

・10 章 81 番

宝は西にいた者たちにより運び出され、神殿に隠されている／場所の秘密も、同じように隠され／飢えた徒党は、神殿を開くだろう／略奪するが、再び取り返される その中で恐ろしい祈祷が

ノストラダムスら西洋人にとっては、宝とはアークのことである。背教した王の手に渡らないように、アークはユダヤ神殿から運び出され、隠された。一旦略奪されるが、レビ族＝秦氏によって取り返され、最終的には伊勢神宮まで運

び込まれた。そのことは、恐ろしい祈祷＝カッパーラにより封印された。

・8章28番

黄金で飾られた偉大なる製造物／略奪の憂き目にあうが、水の中に投げ入れられる／凄まじい火を放つために発見され／大理石に彫られた書付は、教訓を与える

略奪されたアークは水中に捨てられた。アークはレビ族しか扱えないため、それ以外の者が触れると死をもって罰せられた。故に、水中に捨てられたのである。しかし、火を放ち、発見された。中にある十戒石板は、教訓が書かれている。十戒石板は、やはり大理石だったのである。

・7章73番

包囲され、略奪され、貴重なる獲得物は取り返される／それは聖なる出来事の起きる日と変わり／通過し、奪い返され、捕縛される 3つの重なりの地／水底からしるしが現れ、権威の存在が引き上げられる

略奪されたアークは取り返された。そして、3つの重なりの地＝三重県の伊勢神宮に封印された。“権威の存在”とは、戒律を記した十戒石板である。“水底からしるしが現れ、権威の存在が引き上げられる”とは、8章28番の“水の中に投げ入れられる／凄まじい火を放つために発見され”に対応している。

・8章23番

文書は女王の貴重な箱の中で発見される／題名は無く、著者の著名も見当たらない／策略が行われ、隠されるだろう／そこからは、愛の存在は現れて来ない

伊勢神宮は、表向きは女神である天照大神を祀る。文書＝十戒は主が命じて刻ませたものであるから、題名や著者名は無く、策略＝カッパーラの封印により隠されている。隠されている間は、愛の存在＝イエスは再臨しない。

飛鳥氏が言うように、シオニストたちが伊勢神宮に侵入してアークを略奪するが、奪回して再度封印するという解釈では、全体の辻褄が合わない。よって、以上のような解釈が妥当であると思われる。

(2) 白い石（ベルガモンの教会宛）

“勝利を得る者には、隠されているマナを与えよう。また、白い石を与えよう。この石の上には、これを受ける者のほか、誰も知らない新しい名が書いてある。”

勝利を得る者とは、原始キリスト教の教えを信じる者。式年遷宮を行う年に、「お白石持ち行事」がある。これは、旧神領民である地元の人々と全国から参加する一日神領民の手で、五十鈴川で拾い集めた白い石を、御正殿の周囲に敷

き詰める行事である。内宮の宇治橋前に運ばれた白石は、一人一人の手で白い布に包まれて、完成したばかりの御正殿に奉納される。

“これを受ける者のほか、誰も知らない新しい名”とは、内宮に祀られている天照大神であり、イエス・キリストということである。天照大神として行事を行っているが、ほとんどの人は、それがイエスであることを知らないで、“誰も知らない新しい名”とはイエスのことである。この黙示録に従い、このような行事を行っているのである。

(3) 選ばれし 14 万 4 千人（第 6 の封印開封）

“もう 1 人の天使が、生ける神の印を持って、日の出る方から上って来るのを見た。彼は地と海とを損なう権威を授かっている 4 人の天使に向かって、大声で叫んで言った。「我々の神の僕らの額に印を押してしまうまでは、地と海と木とを損なってはならない」私は印を押された者の数を聞いたが、イスラエルの子らのすべての部族のうち、印を押された者は 14 万 4 千人であった。”

“見よ、小羊がシオンの山に立っていた。また、14 万 4 千人の人々が小羊と共におり、その額に小羊の名とその父の名とが書かれていた。（中略）女に触れて身を汚したことの無い者である。彼らは童貞だからである。この者たちは、小羊の行くところへは、どこへでも従って行く。この者たちは、神と小羊に献げられる初穂として、人々の中から贖われた者たちで、その口には偽りが無く、咎められるところの無い者たちである。”

これがイエスによって聖別された者の象徴であり、文字通りの解釈は間違いである。欧米、特に米国では、“選ばれし 14 万 4 千人こそ、最後の審判の際に救い上げられる”というカルトの源泉となっている。

千とか万は“多くの”という意味であり、多くの人々がいる地域や国などを指す。よって、144 が意味を持つ。144=12×12 なので、十二支族であり 12 人の使徒の流れを汲む国＝日本、という意味である。

女に触れて身を汚したことの無い者とは、姦淫＝偶像崇拜の象徴だから、偶像（異教）崇拜していない者ということである。

よって、この 14 万 4 千人とは、日本の中で神道の真髓＝原始キリスト教を信じる者のことである。江戸時代に普及した古神道は呪術的要素が強く間違いであり、仏教や正統キリスト教などの特定の信仰を持っているものは含まれない。ただし、日本の真実が公開されて、それを信じることができる者は含まれる。神の刻印が押されるのは第 6 の封印が解かれてからであるが、これは 20 世紀末から 21 世紀にかけて、神道の秘密や日本の本質について公開され（出版され）、多くの人々が知ることとなったことである。また、全国各地から「御木曳き」や「お白石持ち行事」に参加する一日神領民の制度は、1966 年から開始された。

(4) 白い衣を着た大群衆（第 6 の封印開封の後、選ばれし 14 万 4 千人に続く）

“あらゆる国民、部族、民族、言語のうちから、数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身にまとい、シュロの枝を手にとって御座と小羊との前に立ち、大声で叫んで言った。「救いは、御座にいます我らの神と小羊から来る」（中略）長

老たちの一人が、私に向かって言った。「この白い衣を身にまとっている人々は、誰か、また、どこから来たのか」私は彼に答えた。「私の主よ、それはあなたがご存じです」すると、彼は私に言った。「彼らは大きな苦難を通過してきた人たちで、その衣を小羊の血で洗って白くしたのである」

イスラム教徒の巡礼なども“白い衣を着た大群衆”であるが、“白い石”や“選ばれし 14 万 4 千人”に象徴される特徴がまったく無い。

神社の宮司や禰宜は白装束であるが、伊勢神宮をもってしても、大群衆、というほどの人数ではない。これは、式年遷宮行事である「御木曳き」と「お白石持ち行事」に全身白装束で参加する、旧神領民と一日神領民のことである。

子羊の血で洗うと普通は赤くなる。しかし、これはイエスの犠牲の血のことであり、それによって人類の罪が贖われて白くなったことを表す。

(5) 獣の刻印 666 (第 7 のラッパ)

“私はまた、1 匹の獣が海から上って来るのを見た。それには角が 10 本、頭が 7 つあり、それらの角には 10 の冠があつて、頭には神を汚す名がついていた。

(中略) また、竜がその権威を獣に与えたので、人々は竜を拝み、更に、その獣を拝んで言った。「誰が、この獣に匹敵し得ようか。誰が、これと戦うことができようか」(中略) 地に住む者で、屠られた小羊の命の書に、その名を世の初めから記されていない者はみな、この獣を拝むであろう。(中略) 私はまた、他の獣が地から上って来るのを見た。それには小羊のような角が 2 つあつて、竜のようにものを言った。そして、先の獣の持つすべての権力をその前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷が癒された先の獣を拝ませた。(中略) また、小さな者にも大きな者にも、富める者にも貧しい者にも、自由な身分の者にも奴隷にも、すべての人々に、その右の手あるいは額に刻印を押させ、この刻印の無い者は皆、物を買うことも売ることもしないようにした。この刻印は、その獣の名、または、その名の数字のことである。ここに、知恵が必要である。思慮ある者は、獣の数字を解くがよい。その数字とは、人間を指すものである。そして、その数字は 666 である。”

知恵とは「生命の樹」の奥義を理解すること。よって、「知恵が必要」というのは、「生命の樹」の奥義で理解せよ、ということである。6 は神聖数字 7 に 1 足りないので人間を表すが、それ以外にも意味がある。1 つは、神に近づいたが、高慢に振る舞った故に地に墮とされたサタンのこと。もう 1 つは、サタンの意志を実行する人間のこと。そしてもう 1 つは、神の本来の教えを歪め、権力者にとって都合の良い教義を広める宗教家＝教会のこと。これら三者で「死の樹」を形成して 666 となる。 $6+6+6=18=1+8=9$ だが、イエスのことではなくサタンであり、「生命の樹」の三神三界ではなく、「死の樹」の三悪神三界を示す。

この刻印の無い者は物も買えなくなる。バーコードの両端及び真ん中は 6 を表すので 666 であり、「死の樹」を形成している。また、ヘブライ語の w は 6 番目で、インターネットの www は 666 である。そして将来的には、体内に埋め込

まれるマイクロチップにすべての情報が埋め込まれる。これを実施するのは、三百人委員会＝国際金融資本家＝イルミナティなので、“666 は人物を表す”に適合している。また、“獣”とは1人の人物だけではなく、EUや国連、NATO、教会のような共同体も指す。“角、頭、冠”も国や共同体、その指導者を指す。

しかし、聖書の民は、ヨハネの黙示録にこのような記載があるため、大反対するだろう。日本人は無宗教で人の真似をしていないと不安に陥り、若者や芸能人の誰かが最先端のこととして受け入れると、大多数が受け入れると見なされている。若者に限らず多くの者が、体に穴を開けることをファッションとしていることも要因である。そして中国では、国の指導により容易に国民が動く。

よって、まず日本と中国で実施される可能性が高い。なお、体に穴を開けて飾る飾り物も、偶像崇拝の一部として、旧約では禁じられている。

(6) バビロンの大淫婦（第7のラッパ）

“さあ、来なさい。多くの水の上に座っている大淫婦に対する裁きを見せよう。地上の王たちは、この女と淫らなことをし、地上に住む人々は、この女の淫らな行いのブドウ酒に酔ってしまった。（中略）私は、赤い獣に乗っている1人の女を見た。この獣は、全身至るところ神を冒瀆する数々の名で覆われており、7つの頭と10本の角があった。女は紫と赤の衣を着て、金と宝石と真珠で身を飾り、忌まわしいものや、自分の淫らな行いの汚れで満ちた金の杯を手を持っていた。その額には、秘められた意味の名が記されていたが、それは「大バビロン、淫らな女たちや、地上の忌まわしい者たちの母」という名である。（中略）ここに、知恵が必要である。7つの頭とは、この女が座っている7つの丘のことである。そして、ここに7人の王がいる。（中略）倒れた。大バビロンが倒れた。そして、そこは悪霊どもの住处、あらゆる汚れた霊の巣窟、あらゆる汚れた鳥の巣窟、あらゆる汚れた忌まわしい獣の巣窟となった。すべての国の民は、怒りを招く彼女の淫らな行いのブドウ酒を飲み、地上の王たちは、彼女と淫らなことをし、地上の商人たちは、彼女の豪勢な贅沢によって富を築いたからである。（中略）地上の商人たちは、彼女のために泣き悲しむ。もはや誰も彼らの商品を買う者がいないからである。その商品とは、金、銀、宝石、真珠、麻の布、紫の布、絹地、赤い布、あらゆる香ばしい木と象牙細工、そして、高価な木材や、青銅、鉄、大理石などでできたあらゆる器、肉桂、香料、香、香油、乳香、ブドウ酒、オリーブ油、麦粉、小麦、家畜、羊、馬、馬車、奴隷、人間である。（中略）このような商品を扱って、彼女から富を得ていた商人たちは、彼女の苦しみを見て恐れ、遠くに立って、泣き悲しんで、こう言う。「不幸だ、不幸だ、大いなる都、（中略）あれほどの富が、ひととりの間に、みな荒れ果ててしまうとは」（中略）「これほど大きい都が他にあったらだろうか」と叫んだ。（中略）大いなる都、バビロンは、このように荒々しく投げ出され、もはや決して見られない。（中略）お前の商人たちが地上の権力者となったからであり、また、お前の魔術によってすべての国の民が惑わされ、預言者たちと聖なる者たちの血、地上で殺されたすべての者の血が、この都で流されたからである。”

“7つの丘”はローマの伝説にあり、ローマ教会はこれらの丘の上に建てられ

ている。そして、ローマ教会＝カトリックは世界中に広まった。しかし、“7つの丘”は別の意味にもとれる。世界は7つの大陸と7つの海から成り、一昔前は、世界を制することを7つの海を制する、と言った。7つの海＝全世界を制したのは英国であり、元首は女王である。ニューヨークにも女神があり、世界経済を支配しているが、それを裏から操作しているのはロンドンである。

すなわち、“バビロンの大淫婦”とは、黙示録が記された当時はローマ帝国のことであり、現在では女王を元首に抱く英国のロンドンである。そして、地上の最大の商人であるロスチャイルドの本拠地もロンドンであり、彼らが属するイルミナティ＝三百人委員会が世界中の食料やエネルギーなどをすべて牛耳っており、地上の権力者となっている。金による妄信と、タヴィストック研究所による社会工学＝洗脳＝“魔術”により、世界中の人は惑わされている。彼らの表向きのトップはエリザベス女王であり、現在でも幼児犠牲などの悪魔崇拝を行っているという説もあるから、まさに“大淫婦”に相応しい。しかし、ここに示されているように、第7のラッパが鳴らされると、必ず崩壊するのである。

このように、カッパーラだけではなく、世界の裏事情も知らなければ、本当の意味は解らない。第7のラッパが鳴らされると、次のようになる。

“第7の天使がラッパを吹いた。すると、天に様々な大声があつて、こう言った。「この世の国は、我らの主と、そのメシアのものとなった。主は世々限りなく統治される」(中略)そして、天にある神の神殿が開かれて、その神殿の中にある契約の箱が見え、稲妻、さまざまな音、雷、地震が起こり、大粒の雹が降った。(中略)また、天に大きなしるしが現れた。1人の女が身に太陽をまとい、月を足の下にし、頭には12の星の冠を被っていた。女は身ごもっていたが、子を産む痛みと苦しみのため叫んでいた。また、もう1つのしるしが天に現れた。見よ、火のように赤い大きな竜である。これには7つの頭と10本の角があつて、その頭に7つの冠を被っていた。竜の尾は、天の星の1/3を掃き寄せて、地上に投げつけた。そして、竜は子を産もうとしている女の前に立ちはだかり、産んだら、その子を食べてしまおうとしていた。女は男の子を産んだ。この子は、鉄の杖ですべての国民を治めることになっていた。子は神のもとへ、その玉座へ引き上げられた。(中略)竜は女に対して激しく怒り、その子孫の残りの者たち、すなわち、神の掟を守り、イエスの証しを守り通している者たちと戦おうとして出て行った。(中略)小羊の婚礼の日が来て、花嫁は用意を整えた。花嫁は、輝く清い麻の衣を着せられた。この麻の衣とは、聖なる者たちの正しい行いである」(中略)そして、私は天が開かれているのを見た。すると、見よ、白い馬が現れた。それに乗っている方は「誠実」および「真実」と呼ばれて、正義をもって裁き、また戦われる。その目は燃え盛る炎のようで、頭には多くの王冠があつた。この方には、自分の他は誰も知らない名が記されていた。(中略)そして、天の軍勢が白い馬に乗り、白く清い麻の布をまとしてこの方に従っていた。(中略)この方の衣と腿のあたりには、「王の王、主の主」という名が記されていた。”

まず、「契約の箱」が明らかとなる。“太陽を身にまとう 12 の星の冠を被った女”とは、太陽神であり原始キリスト教の象徴である天照大神のことである。天照大神を日本に持ち込んだ秦氏は月で象徴されるから、月を足の下にし、となる。男の子を産んだことから、“産みの苦しみ”とは、日本が原始キリスト教であることを世界に公開しようとしても、なかなか公開できないことであろう。竜に例えられる連合（国際金融資本、EU、ヴァチカンなど）が阻止しようとするが、最終的には阻止できない。

“子羊”はイエスであり、花嫁はこの女＝天照大神であるから、“婚礼”とは、いよいよ真実が世界に公開されることである。“白い馬”は伊勢神宮や上賀茂神社などで、神の使いとして崇められており、これに乗っているのは「王の王、主の主」であるから、イエスである。“自分の他は誰も知らない名が記されていた”とは、天照大神とイエス、そしてヤハウェの関係である。原始キリスト教以外、三者が一致していることは理解できないのである。

ヨハネの黙示録の最後として、以下の言葉で締める。

“この書の預言の言葉を封じてはならない。時が近づいているからである。不義な者は更に不義を行い、汚れた者は更に汚れたことを行い、義なる者は更に義を行い、聖なる者は更に聖なることを行うままにさせよ。見よ、私はすぐに来る。報いを携えてきて、それぞれの仕業に応じて報いよう。私はアルファであり、オメガである。最初の者にして、最後の者。初めであり、終わりである。「生命の樹」に対する権利を与えられ、門を通して都に入れるように、自分の衣を洗い清める者は幸いである。犬のような者、魔術を使う者、姦淫する者、人を殺す者、偶像を拝む者、すべて偽りを好み、また行ふ者は都の外にいる。私、イエスは使いを遣わし、諸教会のために以上のことをあなたがたに証した。私は、ダビデのひこばえ、その一族、輝く明けの明星である。（中略）この書物の預言の言葉を聞くすべての者に、私は証しする。これに付け加える者があれば、神はこの書物に書いてある災いをその者に加えられる。また、この預言の書の言葉から何か取り去る者があれば、神は、この書物に書いてある「生命の樹」と聖なる都から、その者が受ける分を取り除かれる。以上すべてを証しする方が、言われる。「然り、私はすぐに来る」アーメン、主イエスよ、来て下さい。主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように。”

この言葉故、教会も黙示録を改竄することはできなかったのである。そして、「然り、私はすぐに来る」と約束しているわけであるから、イエスは“その時”に必ず再臨する。

「生命の樹」の奥義を理解し、それを守り抜いてきた日本人として目覚めるべき時は近い。

4：神宮暦

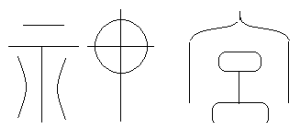
伊勢神宮に参拝した際、ユダヤとの関係が見出せないかと思い、神宮暦を購

入した。

神社の総本山なのに、仏教由来の六曜も記載されていることから、仏教発祥とユダヤとの関係が見て取れる。

また、伊勢神宮の行事だけが記されていると思いきや、赤緯・赤経、日の出・南中・日の入りの時刻（月も）のみならず、内惑星・外惑星の動き、星座の配置など、様々な天文学データが満載されている。天文学も陰陽師が扱ったから、当然といえば当然だが、それにしても詳しすぎる。更に注目すべきは、金星のみ最大光度が記されている。他にも明るい星として木星やシリウスなどがあるが、金星なのである。イエスは“輝く明けの明星”と言っており、これは金星のことであるから、金星の輝きが重要なのである。

そして、暦の表紙にある「神宮」の押印では、「申」の「日」の部分の角を取って丸くしてあり、○に十字架が重ねられた形となっている。これは、「日本」と十字架に掛けられたイエスの象徴であった。つまり、“十字架に掛けられたイエスが示す”のが「神」である。「示」も T 字型の十字架の上に罪状板がある形である。下側の点は真ん中のハネにほぼ平行な縦棒で書かれており、3 本で「生命の樹」を表す。また、この点はアークの上＝贖いの座に於ける一對のケルビムと見なすこともできる。「宮」は屋根で覆われており、社や神殿を表すのであろう。実物は縦書きであるが、ここでは左横書きで示す。



5：ナグ・ハマディ文書

聖典に含まれなかったものとして、ナグ・ハマディ文書に含まれるトマス福音書、フィリポ福音書などがある。これらは正式に採用されなかった新約外典であり、いわば教会にとって都合の悪い“真実”が隠されている可能性がある。（外典のすべてが正しいわけではないだろうが。）

1945 年 12 月、上エジプト（エジプト南部ナイル川の中流域河畔）のナグ・ハマディ村の田で発見された。発見のきっかけは、あるアラブ人農夫が、肥料に使う軟土を掘り出すためにナグ・ハマディ郊外へと出かけたことである。そこは 150 以上の洞窟がある山で、エジプトの長い歴史の中で、墓場や修道院に使われた場所だった。そこを掘っていると偶然、赤い素焼きの壺が出てきて、それを割ったところ、中から出てきたのは、ボロボロになったパピルスで作られた写本冊子の束だった。これが現在「ナグ・ハマディ文書」と命名されている。

ナグ・ハマディ文書の持主は謎である。発見された場所が土中の壺の中という変わった場所であり、意図的に埋められた、つまり隠された物である可能性が高い。発見場所の近くに「パコミウス共同体」と呼ばれる原始キリスト教の修道院が存在していた。ここは、正統派ともグノーシス派とも明確な区別のつかない共同体であった。367 年、アレクサンドリアの司教アタナシオスが、正伝

の 27 文書以外の新約聖書は全て焼き捨てよ、という命令をエジプト中の教会に発令した。そこに居たグノーシス派の修道士の 1 人が、非合法化された知識を守るために著作を埋めて隠した、という説が最も有力である。発見した農夫は、その本を知人のキリスト教神父に預けた。その神父の友人の歴史教師が、この写本の価値に気づいた。写本はそのまま古美術品のブラックマーケットに流されてしまい、転売に次ぐ転売で、更に一部の学者の独占欲により死蔵されるなど、極めて複雑な経緯を経た。ようやくその全貌が明らかになったのは、発見から実に 30 年以上も経過してからである。

現存するものは 13 の写本（コーデックス）から成り、それぞれの写本は、皮で綴じられ装丁されており、各々が 3 から 7 の独立した文書を含み、全体で断片も含め、52 の文書より成る。この文書により、次のことが判明した。

(1) 紀元前後の古代エジプトのコプト語（セム語の一系統）で書かれている。原本はギリシャ語で書かれ、3 世紀後半から 4 世紀初頭頃にコプト語に翻訳されたと考えられる。

(2) 全部で 41 文書からなる。現代の聖書学で欠かせぬ重要文献であり、4 福音書に次ぐ第 5 の福音書としての意義を持つ「トマス福音書」「フィリポ福音書」「エジプト人福音書」などが含まれている。

(3) ナグ・ハマディ文書の半分以上が、“正統” から見て最大の異端グノーシス派の教義文書である。ナグ・ハマディ文書は、創造神話、福音書、説教・書翰、黙示録などに形態的・内容的に分類されており、グノーシス派文献の体裁を示している。「アダム黙示録」「セツの 3 つの教え」等の旧約聖書絡みのグノーシス文書もある。旧約とも関係の無いものも含まれており、キリスト教的な加筆が成されている。文書には、タイトルの無いもの、原題の記されているもの、グノーシス主義名称が冠せられた文書が含まれる。救済神話としては「ヨハネのアポクリュフォン（秘密の書）」「アルコーンの本質」「この世の起源について」、福音書としては「トマス福音書」「フィリポ福音書」「エジプト人の福音書」「真理の福音」「三部の教え」、説教・書翰としては「魂の解明」「闘技者トマスの書」「イエスの知恵」「雷・全き心」「真正な教え」「真理の証言」「三体のプロテーンノイア」「救い主の対話」「ヤコブのアポクリュフォン」「復活に関する教え」「（聖なる）エウグノストスの書」「フィリポに送ったペトロの手紙」、黙示録としては「パウロ黙示録」「ヤコブ黙示録 1」「ヤコブ黙示録 2」「アダム黙示録」「シェームの釈義」「大いなるセツの第 2 の教え」「ペトロ黙示録」「セツの 3 つの柱」「ノーレアの思想」「アロゲネース」がある。現在では、コプト語原典写本に対して、複数の言語で翻訳が行われている。

なお、グノーシスとは、ギリシャ語で“知識”を意味する。グノーシス派は 2 世紀半ばから後半に最盛期を迎えており、後に正統派キリスト教から異端呼ばわりされている。その教義は次のようなものである。

“イエスが宣教した神は至高神であり、悪しきこの世界を造ったユダヤ教の創造神とは違う。人間は、創造神の作品ではあるが、至高神に由来する本来的自己がごく一部備わっている。救済とは、本来的自己がこの世界から解き放たれ、至高神の元に戻ることである。”

グノーシス派の教義に拠れば、自己認識は神の認識であり、究極的に、人間と神は実は同一なのだと説く。かく認識するグノーシス派の教義には原罪意識が無く、故にキリスト教的「罪と悔い改め」を説かない。このようにグノーシス派は、人間を神の下僕とみなす正統派のキリスト教とは根本的に異なる。神は人間の内部にも存在する。人間は、覚醒することによって、神と合一し得る存在と考えている。

また、グノーシス主義の象徴は丸の中に十字で、島津の家紋と同じである！島津は秦氏で、秦氏は原始キリスト教である。思うに、原始キリスト教から分かれ、ユダヤ教の創造神は悪しきこの世界を創造したという極論に至った一派がグノーシス派なのであろう。秦氏の中で知恵を極めた者は五芒星＝ソロモンの星で象徴され、聖徳太子、安倍清明がいる。グノーシス派では「知識、知恵」が大切なのである。ただし、グノーシス派の場合の「知識」とは“救済に至る秘密”のことであり、イエスを信じたりして救われるのではなく、真理を知ることによって救われる、とする。

なお、このような流派は学問上の分類で決められたものであり、当時、自らをグノーシス主義者だとかユダヤ人キリスト教徒だとかいう認識は無かった。正統か異端かという分類をするために、後世の学者が便宜的に名付けたものである。このような分類が成されると、その観念体系に合うように解釈が修正されてしまい、単純に正統か異端かという議論になってしまいがちになることに留意されたい。以下、フィリポ福音書とトマス福音書の中で、興味深い部分を紹介する。[]は欠落部分である。（「イエスが愛した聖女 マグダラのマリア」、マービン・マイヤー著、日経ナショナル ジオグラフィック社。）

★フィリポ福音書

・3人の者がいつも主と共に歩んでいた。それは彼の母マリアと彼女の姉（妹）と彼の伴侶と呼ばれていたマグダレーネであった。なぜなら彼の姉（妹）と彼の母と彼の同伴者は、それぞれマリア（という名前）だからである。

・不妊の女と呼ばれるソフィアは[天]使たちの母である。そして[主]の同伴者はマ[グ]ダラの[マリ]アである。[主は]マ[リア]を[すべての]弟[子]たちよりも[愛して]いた。[そして彼（主）は]彼女の[口にしばしば]接吻した。他の[弟子たちは]彼が[マリ]ア[を愛しているのを見た。]彼らは言った。「あなたはなぜ、私たちすべてよりも[彼女を愛]されるのですか」主は答えた。「なぜ、私は君たちを彼女のように愛さないのだろうか」

*マグダラのマリアがイエスの伴侶であったことが明言されている！！！イエスとマリアは公然とイチャイチャし、使徒の中の誰よりもマグダラのマリアを

愛していたのだ！そして「君たちよりもマリアを愛しちゃうのは、何でだろ？」なんて、とぼけて（のろけて）いる。実に人間らしいイエスである。

★トマス福音書

・ペトロが彼らに言った。「マリハム（マグダラのマリア）は私たちの下から去った方がよい。女たちは命に値しないからである」イエスが言った。「見よ、私は彼女を（天の王国へ）導くであろう。私が彼女を男性にするために。彼女もまた、あなたがた男たちに似る、生ける霊になるために。なぜなら、どの女たちも、彼女らが自分を男性にするならば、天国に入るであろうから」

*マリアのヘブライ語がマリア（ハ）ムである。マグダラのマリアがイエスから殊のほか寵愛を受けていたことに嫉妬した使徒ペトロの、女性蔑視発言である。ペトロは外見的な男と女にこだわっているが、ここから読みとれるのは、外見的な性別ではなく、男性的・女性的性質ということである。ペトロからパウロを経て、現在のキリスト教は普及した。男性優位の原型がここにある。しかし、ペトロはイエスの教えを理解せず、イエスから厳しく叱責されている。

・イエスが言った。「2人の男が1つの寝台に休んでいるならば、1人が死に、1人が生きるであろう」サロメが言った。「あなたは誰なのですか。1人が出たような人よ。あなたは私の寝台に上り、そして私の食卓から食べました」イエスが彼女に言った。「私は同じ者から出た者である。私には父のものが与えられている」[サロメが彼に言った。]「私はあなたの弟子です」[イエスが彼女に言った。]「それ故に私は言うのである。彼が同じである時に、彼は光で満たされるであろう。しかし、彼が分けられている時に、彼は闇で満たされるであろう」

*主の教えに背く同性愛を否定している。（それだけではないだろうが。）また、イエスはサロメと寝た！これは驚くに値しない。当時、イスラエルでは一夫多妻が普通だったからである。ダビデもソロモンも、何人もの妻を有していた。なお、サロメという名はシャロームで、“平安”を表す。

これらの文書から、マグダラのマリアの真相を消し、男性優位の組織を構築した教会の罪は重いと言える。元はペテロの無理解と、女性蔑視なのである。

6：マリア福音書

日本神話は言うまでもなく、ヨハネの福音書やナグ・ハマディ文書でもマグダラのマリアはイエスにとって最も重要な人物である。1896年1月、ドイツ人学者カール・ラインハルトがカイロの骨董品屋で1冊のパピルス写本を購入した。その写本には、それまでに知られていなかった「ヨハネのアポクリュフォン」「イエスの知恵」「ペトロ行伝」「マリア福音書」が含まれていた。（ナグ・ハマディ文書はこれらよりも後で発見された。）「マリア福音書」の原本はギリシャ語であるが、現在入手できる大半は古代エジプト後であるコプト語で書か

れている。ラインハルト博士はベルリンに持ち帰り、目録番号を付けてベルリンのエジプト館に納めた。これ故、同写本はベルリン写本と呼ばれている。

その後、ドイツのエジプト学者カール・シュミットによりドイツ語訳の出版作業が行われた。この後、更にギリシャ語断片が発見され、ライランズ・パピルス、オクシリニコス・パピルスと呼ばれている。「マリア福音書」は欠損部分が多く短いが、以下にその一部（かなりの部分）を紹介する。（全文は前項の著書あるいはカレン・L・キング著、河出書房「マグダラのマリアによる福音書」参照。）

(1) 1～6 頁は欠落

(2) 物質の本性

・救済者が答えた。「一切の本性、すべての形ある物、すべての被創造物は相互に関連して存在する。そして、再びそれはそれ自身のあるべき根源へと解体していく。物質の本性は、その本性に属するところのものへと解体されるからである。聞く耳のある者は聞くべし」

(3) 罪の本性と善き方

・救済者が答えた。「罪といったようなものは存在しない。むしろ、あなた方自身が罪を生み出しているのである。それは、罪と呼ばれる姦淫の本性と一致した行動をとる時に生じる。このような理由により、善き方が、あなた方の中にあらゆる本性に属する（善なる）ものを求めて来たのである。それは、その根源にそれを据えるであろう」（中略）「このようなわけで、私はあなた方に言ったのである。『心満ち足りているがよい。たとえ不満や反感があっても、本性のもう一方の似姿の前（だけ）でも満足と恭順を示すがよい』と。聞く耳のある者は聞くべし」

(4) 救済者の別れの言葉

・祝福された方はこれらのことを言ってから、彼らすべてに別れを告げた。「あなた方に平安があるように！ 私の平安をあなた方自身のうちに得るように！ 『ほら、ここに』『ほら、あそこに』と言ってあなた方を惑わすものに警戒しなさい。まことの人は、あなた方の内側に存在するのだから。それに従いなさい。求めるものは、見出すであろう。だから、行って、王国の福音を告げなさい。私があなた方のために定めたもの以外に、いかなる規則も定めることを〔する〕な。法制定者のように法を発布することもするな。さもなければ、あなた方はその法によって支配されることになる」

(5) マリア、他の弟子達を慰める

・しかし、彼らは心を痛め、激しく泣いた。彼らは言った。「(中略) 彼らはあの方を容赦しなかった。どうして、私たちを容赦するなどということがあろう」

その時、マリアが立ち上がった。彼女は彼ら全員に挨拶して、彼女の兄弟姉

妹たちに言った。「泣くのはよしなさい。めそめそしないで、心を強く持ちなさい！あの方の恵みがあなた方すべてにあり、あなた方をかばって下さるのですから。むしろ、私たちはあの方の偉大さを褒め称えるべきなのです。あの方は私たちのために道を備え、私たちをまことの人間に下さったのです」

マリアはこれらのことを言ってから、彼らの心を善き方〔へ〕向けさせた。すると、彼らは〔救済者〕の〔言葉〕について〔論〕じ始めた。

(6) ペトロ、マリアに教えるよう頼む

・ペトロがマリアに言った。「姉妹よ、救済者が他の女性たちにまさってあなたを愛したことを、私たちは知っています。あなたが覚えている救済者の多くの言葉、あなたが知っていて、私たちの聞かなかった言葉を私たちに話して下さい」

マリアが答えた。「あなた方には隠されている言葉を教えましょう」そして彼女は彼らに語り始めた。

(7) 幻視と知性

・彼女は言った。「私は主を幻の中に見ました。そして私はあの方に言いました。『主よ、私は今日あなたを幻の中に見ました』

あの方は私に答えました。『私を見て動揺しないとは、あなたは何と素晴らしい！心のあるところには、宝があるのです』

私はあの方に言いました。『それでは主よ、幻を見る人は魂<によって>見るのでしょうか、<それとも>霊によって見るのでしょうか』

救済者は答えた。『人が幻を見るのは、魂によってでもなく霊によってでもない。むしろ、その2つの間にある知性によって見るので、[そして、]それが〔(中略)〕』

(8) 11～14 頁は欠落

(9) 魂の上昇

・(略。)魂は第3の勢力(無知)を打ち破って上昇し、第4の勢力と出会った。それは7つの姿をしていた。第1の姿は闇であり、第2は欲望、第3は無知、第4は死への熱望、第5は肉の王国であり、第6は肉の愚かな知恵、第7は怒れる者の知恵である。これらが怒りのもとにある7つの勢力である。

彼らが魂に尋問した。『人殺しよ、お前はどこからやって来たのか。そして、お前が向かっているのはどこなのか、空間の征服者よ』

魂は答えて言った。『私を支配するものは根絶された。私を取り囲むものは撲滅された。そして私の欲望は終わりとなった。また無知は死んだ。世にあって、私が解き放たれたのは世からであり、[そして]範型の内にあって、天的な範型からであり、忘却の鎖からである。これから先、アイオーン(神的な存在)のしかるべき時のために、私は沈黙の内に休息を受けよう』

マリアは以上のことを言ってから、沈黙した。救済者が彼女と語ったのはここまでだったからである。

(10) マリアの教えをめぐる弟子達の論争

・すると、アンデレが答えて兄弟たちに言った。「彼女が言ったことについて、あなた方の言いたいことがあれば言うが良い。私に関する限り、救済者がこのようなことを言ったとは信じられない。これらの教えは馴染みのない考え方である」

ペトロが答えて、同じような懸念を持ち出した。彼は救済者について彼らに言った。「あの方が我々に隠れて一人の女性と内密に語られたのか。我々の方が向きを変えて、彼女の言うことを聴くことになるのか。あの方は、我々以上に彼女を選んだのか」

そのとき、[マ]リアは泣いて、ペトロに言った。「兄弟ペトロよ、あなたは何を想像しているのですか。私がこのようなことを自分一人で勝手に考えたり、救済者について私が虚偽を語っているとでも思っているのですか」

レビが答えて、ペトロに言った。「ペトロよ、あなたはいつも怒る人だ。今、私には、あなたはまるで敵対者に対するようにこの女性に議論を仕掛けている。もし、救済者が彼女をふわさしい者としたのなら、彼女を拒否するあなたは一体何者なのか。確かに、救済者は彼女を完全に知り、あの方が我々よりも彼女の方を愛したのはもっともである。むしろ、我々は恥じ入るべきである。完全なる人間を身に纏い、あの方が我々に命じたように、我々自身まことの人間を身に付け、福音を告げ知らせるべきである。救済者が語られたこととは違う規則や法は、一切定めないで」

彼らは教える[ために]、そして告げるために出て行った。

マリアは“マグダラのマリア”とは特定されてはいないが、フィリポ福音書などから、マグダラのマリアである。この福音書は、イエスが「私を見て動揺しないとは、あなたは何と素晴らしい」と言っていることから解るように、イエス復活後の話しである。(ただし、幻の中に、である。)

この中で、マリアは極めて重要、というよりも、イエスから最も愛された弟子であり、他の使徒では理解できない物質、罪、知恵などの教えも十分理解しうる、霊的にも高いレベルに達した存在である。そして救済とは、知性によって見る＝真理を知ることにより、魂が救済され、開放されることである。

ペトロの発言は、アンデレの問いに答えているようで、実は別のことを言っている。ペトロは、イエスがマリアにだけ特別な教えを語ったわけがないと主張する。そもそもこの話は、ペトロが要求してマリアが応じたものであるのにも関わらず。そして、もしマリアの話を信じなければならないのなら、我々はマリアを中心とした教団にならなければならないが、そんなことになっても良いのか、と言っている。ここにトマス福音書を合わせると、ペトロの心理が良く理解できる。

“ペトロが彼らに言った。「マリアは私たちのもとから去った方が良い。女たちは命に値しないからである」イエスが言った。「見よ、私は彼女を天の王国へ導くであろう。私が彼女を男性にするために。彼女もまた、あなた方男たちに似

る、生ける霊になるために。なぜなら、どの女たちも、彼女らが自分を男性にするならば、天国に入るであろうから”

いくらペトロが男性優位を望んだとしても、精神的に成長しなければ駄目なのである。マリア福音書でも、男だとか女だとかいうことではなく、「まことの人自分自身の内側に存在する」から、あの方が我々に命じたやり方で、自分のために完全なる人間を生み出すべきである（＝完全なる人間を身に纏う）、とペトロはレビから叱責されている。ペトロの迷いや浮ついた行動は、新約でも述べた通りである。

また、イエスは「ほら、ここに」「ほら、あそこに」と言って人を惑わすものに警戒しなさい、まことの方はあなたの方の内側に存在するのだから”と言っている。そして、“あなたの方のために定めたもの以外に、いかなる規則や法も定めるな、さもなければ、その法によって支配されることになる”とも言っている。男性優位の思想で、救済者の弟子たるには男性でなければならないとするペトロの考えは、教団の分裂を引き起こした。そして、パウロがペトロを受け継いで教会が設立され、現在のキリスト教が確立された。教会は男性優位の権力を守るための組織と化し、マグダラのマリアを娼婦として陥れることにより、絶対的な権力を握ることとなった。まさに教会こそ、イエスが注意を喚起したそのものの存在となったのである。

このように、ナグ・ハマディ文書やマリア福音書など、キリスト教初期の状態を伝えている文書では、いずれもマグダラのマリアは決して娼婦などという存在ではなく、イエスの最も重要な弟子として描かれている。そして、現在の教会の礎となったペトロこそ、弟子達の集団が離反した原因であることを暗示している。

キリスト教初期の時代はこのような認識が流布していたため、さすがに正典を編纂する際、ペトロの裏切り行為や理解の低さ、マグダラのマリアの重要性を外すことはできなかったのであろう。ペトロが鶏が鳴く前にイエスのことを知らないと言ったり、イエスの教えを理解できなくて「サタンよ、引き下がれ」と言われたりしたことや、復活後のイエスが真っ先にマグダラのマリアをはじめとする婦人たちに会っていることなどが、それである。そして、何人もの女性の逸話を挿入してマグダラのマリアが娼婦であったと錯覚させるような表現に変えたり、正典の福音書を改竄して、教会の教えを絶対的なものへと強化していったのである。ペトロを祖とするアンティオキア教団＝ローマ教会の欺瞞が、このような古文書からも証明されたと言っても良い。

7：ユダの福音書

新約の外典である「ユダの福音書」には、宇宙創造の秘密がイエスにより語られている。「ユダの福音書」の写本は 1978 年頃、中部エジプトのミニヤーの北 60 キロにあるマガーガに近い、ナイル川右岸カララ山地の中の、盗掘された

墓の中から発見された。写本はすべて中部エジプト地方で用いられていた、いくつかのサイド方言で書かれていた。この写本は様々な古美術商により翻弄され、かなりの断片が修復不能となってしまったが、2004年7月、ジュネーブ大学名誉教授ロドルフ・カッセルによって公開された。写本の成立は、AD2世紀頃と言われている。

ユダとは、イエスを裏切ったとされるイスカリオテのユダのことである。この福音書では、ユダはイエスの神性を理解した唯一の弟子であり、救済のためにイエスが十字架に掛かることを手助けしたヒーローである。また、創造神も何人か存在し、この地球を創造した神は下位の創造神であり、狭量で悪意に満ちており、我々の世界が問題だらけなのはそのせいであるとしている。それ故、「知恵」の言葉に耳を傾け、内なる神聖な光に気づかねばならない、という典型的なグノーシス主義的文書である。また、創世記に登場するセツに言及し、神の知識を持つ人類はセツの世代に属すると断定している。これ故、セツ派と呼ばれることも多い。以下、内容を断片的に紹介する。[]は欠損部分である。

(「ユダの福音書」、ロドルフ・カッセルら共著、日経ナショナル・ジオグラフィック社。)

(1) 序

・イエスが週の間、過ぎ越の祭りを祝う 3 日前に、イスカリオテのユダとの対話で語った、秘密の啓示の話。

(2) イエスの地上に於ける宣教

・ある日、イエスは弟子たちと共にユダヤにいて、見ると、弟子が集まって信仰深く儀式を行っていた。集まって座り、パンに感謝の祈りを唱えている弟子達に「近づく」と、「イエスは」笑った。

弟子たちは言った。「先生、あなたは何故、笑っておられるのですか。我々は正しきことを行っていたのですが」イエスは答えた。「私はあなた方を笑っているのではない。[あなた方は]自分たちの意志でそうしているのではなく、そうすることによって、あなた方の神が賛美される[だろう]から、そうしているのだ」彼らは言った。「先生、あなたは我々の神の子です」イエスは言った。「あなた方に、どうして私が解るのか。本当に、あなた方に言う。あなた方の内にある人々のどの世代にも、私が解らないだろう」

*特に「最後の晩餐」の場面ではないが、パンに感謝の祈りを捧げている。イエスは、“あなた方の神が賛美されるからそうしている”と言っているので、イエスが説く神とは異なった神に対して祈っていることになる。また弟子たちは、“あなたは我々の神の子です”と言っているので、パンへの感謝はイエス独自のものではない。後で解るが、イエスを理解できる者は、その者の霊がセツの世代に属する者のみである。

(3) 弟子たち、腹を立てる

・これを聞いて、弟子たちは腹を立て、怒りだし、心の中でイエスを罵り始め

た。彼らが理解していないのを見ると、[イエスは] 彼らに言った。「何故、この興奮が怒りに変わったのか。あなた方の神があなた方の内にいて、[…] があなた方に魂の[中で] 腹を立てさせたのだ。あなた方の内にいる、[勇気ある] 完全なる人を取り出して、私の眼前に立たせなさい」彼らは口を揃えて言った。「我々にはそれだけの勇気があります」しかし、彼らの霊は、イスカリオテのユダを除いて、[イエスの] 前に立つだけの勇気がなかった。ユダはイエスの前に立つことができたが、イエスの目を見ることができず、顔を背けた。

ユダはイエスに[言った。]「あなたが誰か、何処から来たのか私は知っています。あなたは、不死の国バルペーローからやって来ました。私には、あなたを遣わした方の名前を口に出すだけの価値がありません」

* “あなた方の内にいる、[勇気ある] 完全なる人” がセツの世代である。イエスは永遠で不死の国であるバルペーローから来たことを、ユダは知っていた。

(4) イエス、ユダだけに話しをする

・ユダが何か崇高なことについて考えているのを知って、イエスは彼に言った。「他の者から離れなさい。そうすれば、王国の秘密を授けよう。お前はそこに達することはできるが、大いに嘆くことになるだろう。12 [の使徒] が再び全員揃って神と共にあるために、誰か他の者がお前に取って代わるからだ」(略)

* “誰か他の者がお前に取って代わる” とは、ユダが裏切りによって死に、その代わりに他の者が使徒となることである。

(5) イエス、再び弟子たちの前に現れる

・このことがあった翌朝、イエスは再び弟子たちの前に[現れた。] 彼らはイエスに言った。「先生、我々と別れて何処へ行き、何をしておられたのですか」イエスは答えた。「私はここではない、別の大いなる、聖なる世代の所へ行っていた」弟子たちは言った。「主よ、今はこれらの国にいない、我々より優れ、我々より聖なる大いなる世代とは何ですか」

イエスはこれを聞いて、笑って言った。「何故あなた方は心の中で、力ある聖なる世代のことを考えているのか。本当にあなた方に言う。このアイオーン(神的存在)に生まれて、あの[世代]を見る者はいないだろう。星々の天使の軍勢も、あの世代を支配することはなく、死を免れない生まれの人が、あの世代と交際することもない。何故ならあの世代は、[…] となった[…] から来てはいないからだ。[あなた方の] 内にある世代の人々は、人間の世代から来ていて、[…] 力、それは[…] それ以外の力[…] [それに] よってあなた方が支配する」

弟子たちはこれを聞いて、それぞれ心を騒がせた。彼らは、一言も語ることができなかった。(略)

* “あの世代” とは、セツの世代のことである。

(6) 弟子たち、幻の中で神殿を見て、そのことを話し合う

・(略) [イエスは言った。]「[祭司たちはどのような人々か。] 弟子たちは[答えた。]「ある者は…」2週間、[ある者は] 自分の子を犠牲として捧げ、他の者は妻を捧げ、互いに賞賛し、謙遜しあい、ある者は男と床を共にし、ある者は[食肉の処理]に携わり、ある者は多くの罪と不法行為を犯しています。そして、祭壇[の前]に立つ人々はあなたの[名]を唱え、自分たちの行いは不完全なのに犠牲は完全に行っています。[…]

そう言うと、彼らは黙った。心が騒いだからである。

* 当時の神殿の様子である。祭司たちは信仰を誤解し、偶像崇拜による姦淫＝幼児の生贄、女の生贄、男色などがまかり通っていたことが、この文書により裏付けられる。

(7) イエス、神殿の隠された意味を説き明かす

・イエスは言った。「何故、心を騒がせるのか。本当に私はあなた方に言う。その祭壇の前に立つ祭司たちは皆、私の名を唱えているのだ。再びあなた方に言う。私の名は、人間の世代を通して、星の世代のこの[…]に書かれていた。[そして彼らは] 私の名によって、恥ずべきやり方で、実がならない木を植えた」

イエスは言った。「あなた方が見た捧げ物を受け取っていた人々、それがあなた方の正体である。それが、あなた方が仕える神であり、あなた方が見た12人はあなた方である。あなた方が見た、犠牲として捧げられていた牛は、あなた方が迷わせてその祭壇の前に連れて行った人々である。[…]は立って、このように私の名を用いるだろう。そして、代々の信仰深い人は、彼に従い続けるだろう。彼の後、[淫らな者たち]から別の1人が立ち、また別の1人が子殺しの中から立ち、また別の1人が男たちと床を共にする人々や物断ちする人々、その他の汚れた、不道德な、誤った人々、『我々は天使と似ている』と言う人々から立つだろう。彼らはすべてを終わりに導く星である。何故なら人間の世代は『見よ、神は1人の祭司、すなわち、誤りに仕える者、の手からあなた方の犠牲を受け取った』と言われてきたからである。しかし、『終わりの日に、彼らは恥に落とされる』と命じられるのは主、万物の主である」

イエスは言った。「あなた方の祭壇の上に[…]したものを犠[牲に捧げ]てはいけない。それらのものは、あなた方の星と天使の上にあり、そこで既に終わっているからだ。だから、彼らをあなた方の前で[毘に掛か]らせ、去らせなさい。(中略)」

イエスは言った。「私と争うのはやめなさい。(中略) このアイオーンの[…]時のために[…]だが彼は潤すために来た。神の楽園を、そして続いていくだろうその[世代]を。なぜなら、[彼は]あの世代の[生の歩み]を汚さないからである。しかし、[…]永遠に」

* (6)でもそうだが、聖書では、祭司らはイエスを認めていなかったとあるので、彼らが神殿で崇めていたのは、偶像崇拜の神である。だから、「私＝イエスの名」を唱えていたのではなく、ヤハウエに偶像の神を重ねて拝んでいたのである。

つまり、弟子たちはイエス＝ヤハウエであることを知っていたから、(6)で「あなたの名＝ヤハウエ」を唱えている、と言っているのである。

“実がならない木”とは、ヤハウエに偶像の神を重ねて拝んでいたから、「生命の樹」ではなく、「死の樹」のことである。イエスは「生命の樹」である。

“あなた方が見た捧げ物を受け取っていた人々、それがあなた方の正体である”ということから、弟子たちはイエスを理解せず、神殿の祭司に従っていただけである。そして、彼らが後に教会を設立することとなる。

「我々は天使と似ている」と言う輩が、信仰深い人に対してイエス＝ヤハウエの名を用いて悪用することをイエスは預言しており、これはその後の教会の暗示でもある。終わりの日に彼らは恥に落とされる、ことから、教会が恥辱にまみれていることが、いずれ明らかになる。それは、万物の主＝御父の命による。また、ここでも、偶像崇拜の生贄を禁止することが強調されている。

「彼」とは、おそらくユダのことであろう。

(8)ユダ、イエスに「あの世代」と「人間の諸世代」について尋ねる

・ユダは「イエスに」言った。「[ラ] ビ、あの世代は、どのような実りをもたらすのですか」イエスは言った。「あらゆる人間の世代は死ぬ。しかし、これらの人々は、地上の時を終え、霊がその人たちから去る時、肉体が死ぬのであって、その魂は死なず、天へと引き上げられる」

ユダが言った。「では、他の人間の世代はどうなるのでしょうか」イエスは言った。「[岩] に蒔いた種から、実りを収穫することはできない。[汚れた] 世代 [...] もまた[この] ようであり [...] また墮落しがちなソフィア [...] 死を免れない人々を創造した手、彼らの魂が天上にある永遠の御国へと昇って行くために。[本当に] お前に言う。[...] 力 [...] 天使は、[...] 聖なる世代 [...] 人々に [...] を明らかにできるだろう」こう言うと、イエスは離れて行った。

*あの世代＝セツの世代は霊的に引き上げられるが、それ以外は引き上げられない＝救われない。“天へ”とは、「生命の樹」の至高世界とも解釈できる。

欠損が多くて解りにくい、墮落しがちなソフィア、とは、ソフィアが知恵のことだから、「知恵」は悪用されがちであることだろう。

(9)ユダ、幻について語り、イエスが答える：略。

(10)ユダ、自らの運命について尋ねる

・(略) イエスは答えて言った。「お前は13番目となり、後の世代の非難の的となり、—そして彼らの上に君臨するだろう。最後の日々には、[世代]のもとに引き上げられるお前を、彼らは罵ることだろう」

*ユダのみがイエスの教えを理解する者であり、セツの世代にまで引き上げられる。ユダの霊は13番目となり、12人の使徒から出て、12という数字に勝る者となる。

(11) イエス、ユダに宇宙創造について教える一霊と自ら生まれた者

・未だかつて何人も目にした〔ことの〕ない〔秘密〕をお前に教えよう。それは、果てしなく広がる御国である。そこは、天使たちでさえ見たことがないほど広大で、〔1 つの〕目には見えない〔霊〕がある。そこは天使も見たことがなく、いかなる心の思念によっても理解されず、いかなる名前でも呼ばれたことがない。そして、そこに輝く雲が現れた。彼は言った。「1 人の天使を、私の仕え手として生じさせよ」

大いなる天使、光り輝く神なる、自ら生まれた者が雲の中から現れた。彼の故に、4 人の天使が別の雲から生じ、天上にある自ら生まれた者の仕え手となった。自ら生まれた者は言った。「〔…〕を生じさせよ〔…〕」そして、それは生じた〔…〕。そして、自ら生まれた者は第 1 の輝く者を〔創造し〕、彼の上に君臨させた。自ら生まれた者は言った。「天使たちを生じさせ、〔彼に〕仕えさせよ」すると、数え切れないほどの数万の天使たちが生じた。自ら生まれた者は言った。「光り輝くアイオーンを生じ〔させ〕よ」すると、アイオーンが生じた。アイオーンは彼の上に君臨させる第 2 の輝く者を創造し、更に数え切れないほどの数万の天使たちを創造して仕えさせた。自ら生まれた者は同じようにして、他の光り輝くアイオーンも創造した。自ら生まれた者はこのアイオーンを君臨させ、彼らのために数え切れないほどの数万の天使たちを創造し、仕えさせた。

* “果てしなく広がる御国” とは、宇宙を創造した意識（創造の意識）のことである。そこから“自ら生まれた者” が生まれ、更に天使やアイオーンが生じた。本来の唯一絶対神とは、この「創造の意識」とも言える。

なお、“自ら生まれた者” はギリシャ語起源のコプト語で、アウトゲネースと言う。

(12) アダマスと輝く者たち

・アダマスは天使たちですら見たことがない第 1 の輝く雲の中で「神」と呼ばれる者たちに囲まれていた。彼は〔…〕ということ〔…〕像〔…〕そして〔この〕天使に似せて。彼は不滅のセツの〔世代〕を出現させ〔…〕その 12「…」その 24〔…〕。彼は 72 の輝く者たちを、霊の意思に従って、不朽の世代の中に出現させた。72 の輝く者たちもまた、その数が 1:5 となるようにとの霊の意思に従って、不朽の世代の中に 360 の輝く者たちを出現させた。

12 の輝く者の 12 のアイオーンが、彼らの父となる。それぞれのアイオーンに 6 つの天があり、72 の輝く者たちに対して 72 の天があり、それぞれに対して〔5 つの〕大空があつて、〔合わせて〕360 の〔大空に対し…〕彼らは権威と、栄光と賛美のための〔数え切れないほどの〕多くの天使たちを、〔更にその後〕処女なる霊たちを、すべてのアイオーンと天とその大空の栄光と〔賛美〕のために与えられた。

* アダマスとは本来のアダムのこと。この福音書では、アダムは地球上で創造されたのではなく、「創造の意識」の雲の中で創造されたことになっている。

また、12 という数字の意味が書かれているが、肝心な部分が抜けているので

解りづらい。

(13) 宇宙、混沌、および冥界

・これら大勢の不死の者たちを、父及び自ら生まれた者と、その 72 人のアイオーンと共にいる 72 の輝く者たちは、宇宙―すなわち破滅―と呼んでいる。この者の中に、第 1 の人間が不滅の諸力と共に現れた。そして、彼の世代と共に現れたアイオーン、その中に知識の雲と天使があるアイオーンの呼び名がエルである。[…] アイオーン […] その後 […] 言った。「12 の天使を生じさせ、混沌と [冥界] を支配させよ」

そして見なさい、あの雲から姿を現した 1 人の [天使] を。その顔は炎で輝き、その姿は血で汚れている。彼の名はネブロといったが、それは「反抗する者」という意味である。別の人々は彼をヤルダバオートと呼ぶ。もう 1 人の天使、サクラスもまた、その雲からやって来た。そこでネブロはサクラスと共に 6 人の天使を創造して助手とし、それらが諸天に 12 の天使を生み出し、それぞれが諸天の分け前を受け取った。

* 旧約で御父に当たるエルがここで登場する。ネブロは「ニビル」に似ているので、シュメールの神々として君臨したニビル人＝アヌンナキがこれに相当するのかも知れない。ヤルダバオートと共に、サクラスという悪神が地球を支配することとなった。

(14) 支配者と天使

・12 人の支配者たちが 12 人の天使と話をした。「あなたたちそれぞれが […] そして彼らに […] 世代 […] 天使たち」

第 1 が [セ] ツ、キリストと呼ばれる者。第 [2] がハルマトート、[…] 者。第 [3] がガリラ。第 4 がヨーベール。第 5 [が] アドーナイオス。

以上が、冥界を、そして何よりもまず、混沌の世界を支配する 5 人である。

* “第一が [セ] ツ、キリストと呼ばれる者” という点で、この文書を書いた一派はセツ派と呼ばれる。

ハルマトートはエジプトのトート神に通じ、アドーナイオスは古代ヘブライ後で“我が主”を意味するアドーナイに、ギリシャ語の男性格を示す接尾辞 os を付けたものである。

(15) 人間の創造

・次にサクラスは天使に向かって言った。「我々の姿形に似せて人間を創ろう」彼らはアダムとその妻エバを創りあげた。エバはその雲の中でゾーエーと呼ばれる。この名によってすべての世代が男を求め、彼らのそれぞれが女をそれらの名で呼ぶからである。

* 旧約の創造主に相当するのがサクラスである。そして、地球上でのアダムを創りあげた。ゾーエーとは、ギリシャ語で「命」を表す。

(16)ユダ、アダムと人類の運命について尋ねる：略。

(17)イエス、邪悪なものの滅亡をユダや他の者たちと話し合う

・(略) イエスは言った。「本当に、私はあなた方に言おう。彼らすべてにとって、星々が事物を成就させるのだ。サクラスに割り当てられた時間が終了すると、最初の星があれらの世代と共に出現し、彼らは約束したことを成し遂げる。それから、彼らは私の名において姦淫し、彼らの子供たちを殺し、(中略)」

「私は[お前を]笑ったのではなく、星々の過ちを笑ったのだ。この6つの星々は、この5人の闘士たちと共にさ迷い、そのすべてが、そこに生きる生き物たちと共に滅ぼされてしまうからである」

*地球は邪悪なサクラスたちに支配されているが、サクラスが支配する期間に限られている。これは、黙示録に通じる。

(18)イエス、洗礼を受けた人々と、ユダの裏切りについて語る

・(略)「だが、お前は真の私を包むこの肉体を犠牲とし、すべての弟子たちを超える存在となるだろう。(中略)そしてその時、アダムの大いなる世代は高みに上げられる。何故なら、天、地、天使たちが存在するよりも前に、永遠の王国からやって来たあの世代が存在するからである。さあ、これでお前にすべてを語ったことになる。目を上げ、雲とその光の中、それを囲む星々を見なさい。皆を導くあの星が、お前の星だ」

ユダは目を上げると、明るく輝く雲を見つめ、その中へと入っていった。

*アダムの大いなる世代＝セツの世代のみ、高みに上げられる。そして、ユダこそが、イエスの肉体を犠牲にできる唯一の存在である。

(19)結び(ユダ、イエスを裏切る)

・大祭司たちは不平を言った。彼が部屋に入って祈りを捧げていたからである。しかし、何人かの律法学者たちはそこにいて、祈りの間に彼を捕らえようと注意深く見張っていた。彼が皆から預言者と見なされ、彼らは民衆を恐れていたからである。

彼らはユダに近づいて、言った。「お前はここで何をしているのか。お前はイエスの弟子ではないか」ユダは彼らの望むままに答えた。そして、いくらかの金を受け取り、イエスを彼らに引き渡した。

*この場面で、「ユダの福音書」は終わりである。イエスはゲッセマネやオリブ山ではなく、部屋で祈っていた。

今回、「ユダの福音書」を紹介したのは、ユダの本質を知るためではなく、宇宙の創造や神々の正体について書かれているからである。

「ユダの福音書」に依ると、地球の創造神が誕生する前に、唯一絶対的な「創造の意識」があり、そこから神性を帯びた存在が多数創造された。72 のアイオ

ーンがいて、それぞれが“輝く者”と共にあり、それぞれに5つの天空（計360の天空）があり、無数の天使が存在した。地球は破滅＝墮落の世界に属しており、唯一絶対神（創造の意識）の優れた創造物ではない。様々な神性が誕生した後、ようやく“エル”という名の旧約に相当する神が登場し、それから、血にまみれた反逆者であるヤルダバオートと、愚か者のサクラスが誕生した。この最後の2神が地球を支配し、人間を創造した。この2神は、究極の神の国やこの邪悪な世界についての真実を学び、人間が囚われた世界から逃れる方法を知ること、避けるべき存在なのである。それを教えに来たのが、不死の国バルベーローからやって来たイエスである。イエスの教えを理解しない弟子たちは、“自分たちの神”に祈りを捧げることにより、この血にまみれた2神を崇拝していることになり、真の絶対神を崇拝しているのではない。これが、「ユダの福音書」の言うところの、宇宙創造の秘密である。

ここまでは「ユダの福音書」の概要を紹介し、それに対する解釈を行った。しかし、これだけでは、何故イエスが十字架に掛けられる必要があるのか解らない。それに、カイン派と呼ばれる一派は、このような忌まわしい（地球の）創造主に最初に反逆したカインを信仰の中心とし、極端なまでに旧約の神に逆らって安息日を無視し、豚肉を食べ、姦淫にふけた。同じグノーシス主義文書のナグ・ハマディ文書の中に見つかった「エジプト人の福音書」などでは、ソドムとゴモラの人々を正当な理由を持つ反逆者として褒め称えている。エジプトは魔術や多神教による偶像崇拝が盛んであったから、そのような考えが容易に受け入れられたのであるが、この類の偽典・外典は、悪魔主義的要素が多く見られる。よって、「ユダの福音書」も悪魔主義的とされる偽典・外典の一種、あるいは偽書と判断されても仕方がない。

実は、すべての文明の根源であるシュメールを調べると、聖書とは何なのか、神々の正体は何なのか、ということが解る。真相は＜神々の真相＞で述べる。

8：イスラム教に於けるイエス（Wikipedia、「イエス・キリスト」参照。）

イスラム教に於いても、ユダヤ教の預言者と共にイエスを預言者の1人と見なしている。イスラム教では、“マルヤムの子イーサー”と呼ばれるが、聖クルアーンの記述によれば、神の奇蹟によってマリアの体内に創造された特殊な出自であるが、他の預言者同様、アダムの子＝人類の1人であり、決して「神の子キリスト」とは認められていない。聖クルアーンはイーサーを度々記載しており、死者蘇生や誕生直後に話したといった奇蹟の数々が明言されている。

一方で、アッラーは人類を含め一切の被造物を超越した存在でありかつ創造主であり、アッラー自身が“子を産みもしなければ生まれもしない”ために、イエスが「神」であることも「神の子」であることも明確に否定している。更に、（別人が十字架で磔にされたため）イーサーは十字架に掛かっておらず、預言者としての使命を果たして生涯をまっとうしたとされる。

しかしながら、イーサーは救世主メシア（マシーフ）であることは認めら

れており、最後の審判に先立って出現する反キリスト、ダッジャールを討伐するために、地上に再臨するとされている。それ故、“アッラーの救世主イーサー”という尊称も一般的である。

また、預言者ムハンマドは昇天の旅であるミウラージュの奇蹟に於いて、天使ジブリール（ガブリエル）の導きにより天上でムーサー（モーゼ）とイーサーの二大預言者に会っている。イーサーは神の啓示を受けた通常の預言者であるのみならず、使徒としても聖クルアーンやハディースなどでは重視して言及されており、イスラム教に於いても、イエスは大変に重要な地位を占めている。

参考著書：

- ・聖書（ハンディバイブル） 新共同訳、日本聖書協会。
- ・学研ムーブックス、ネオ・パラダイム ASKA シリーズ。
- ・飛鳥昭雄著、「言霊でしか解けない聖書」、徳間書店。
- ・マービン・マイヤー著、「イエスが愛した聖女 マグダラのマリア」、日経ナショナル ジオグラフィック社。
- ・カレン・L・キング著、「マグダラのマリアによる福音書」、河出書房。
- ・ロドルフ・カッセルら共著、「ユダの福音書」、日経ナショナル・ジオグラフィック社。

初版：2007 年 2 月

改定 3 版：2009 年 4 月

改定 4 版：2012 年 12 月